

## 第六講 歴史主義の問題と社会史の台頭

### 歴史主義の特徴

経験的解釈に基づく歴史記述（経験主義的解釈学）。

「本来いかにあったか **Wie es eigentlich gewesen sein.**」

合理主義：神話や超自然的存在の関与を排除

合理的に計算された人間の行為

事実を国民史の枠組みの中に埋め込む。

ベルリン大学でゼミナール形式による授業。

→歴史を外交史に特定（歴史主義の起源）。

→公文書の主観性・プロパガンダ性・民衆を無視。

→国家のイデオロギーを代弁。

大学という教育・研究機関の存在。

歴史学者の卵はどこで教育され、研究し、評価されていくのか。

大学という場の存在。

教育を通じて方法論・社会的帰属意識・階級的価値観・国家観の共有

→ギルドの形成。

### 歴史家集団の閉鎖性

教授資格審査（Habilitation）

宗教的：プロテスタント。

民族的：ユダヤ人の排除。

政治的：自由主義。

社会的：中産市民層。

国民国家を基礎とする外交史・経験主義的解釈学・外交官僚に対する信頼

様々な利害集団から構成される国内を無視

君主や貴族層からも民衆からも自立し、価値中立的という外交官への信頼

### 社会的環境の変化

ドイツ統一の達成（1871年）

東ドイツのユンカーの権威主義的支配に対する嫌悪感

労働者階級の台頭と社会主義政党の拡大に対する警戒心

1863年 全ドイツ労働者協会（ラッサール）

1869年 社会民主労働者等結成（ベーベルとリープクネヒト）

1875年 社会主義労働者党組織（ゴータ合同）  
1878年 皇帝狙撃事件  
1890年 ドイツ社会民主党（エルフルト綱領採用）  
労働組合の結成相次ぐ  
政府の自由主義的な政策に期待  
限界と反動化